

昭和五十六年五月十七日 ご講演

「八十年代の日本の進路」

筑波大学学長 福田信之先生

筑波大学の福田でございます。今日は和敬塾二十六周年記念の大変おめでたい日で、塾長さんの銅像除幕式もあったようでございます。私は「八十年代の日本の進路」という大変難しい題で話すことになっております。ガルブレイスというアメリカの学者は、七十年代は非常に不確実とか、不確定な時代であるという表現を巧みに使いまして、世界中で有名になりました。八十年代はより不確実であり、より不透明であり、より激動するだろうと言われています。

実際、七十年代の終り頃からいろんな問題が起りました。中近東ではイランが国内の革命に続いて、超大国アメリカの大使館を占領しました。これは明かに侵略行為でありますので、国連でも反対の意見なく、イランの侵略行為を決議したわけであります。このように世界中から支持を受けながらも、カーター政権下の超大国アメリカはイランに対して何の手出しもできなかつたのです。そのうちレーガン政権となり、レーガン就任式開始後三十八分経って、全人質

を釈放したわけであります。一九七九年末、アフガンにはソ連の大軍十万人が乗り込んで、アフガン大統領を殺害し、すでに百万人以上のアフガン人を殺したと言われております。このことは先般ユネスコに出席したアフガン政府の文部大臣が公言したもので、よくあれでアフガンへ帰れるものかと思っていましたところ、そのままた命しました。例のベトナム戦争のときには、反戦運動がベトナムでも、日本でも、アメリカでも、広く世界中で起って、遂にアメリカは支援の軍隊を引揚げました。その後一九七五年に所謂解放が行われましたが、彼等が言う解放の意味が私にはよくわからないんです。解放されたはずのベトナムから、依然として五十人乗り程度の小船に何百人も積み込まれた難民（ボートピープル）が出国しているのです。しかも政府は彼等から一人当たり何十万円かの金銭をとりあげるといわれています。何の希望も持てない祖国ベトナムを去って、半分くらいは南支那海の藻屑と消えたと言われております。何所かへ

たどり着いても、果たして自分達に生活が保障されるかどうか分らないのです。祖国を捨てるということは辛いことであり、しかも政府に身ぐるみ剥がされて追い出され、半分死ぬことを覚悟で出向いて行くとなれば、これは大変なことですね。これが解放ベトナムの実状であり、解放直後には直ちに隣のカンボジアを侵略しました。カンボジアはポルポト政権というのが当時やっぱり革命政権でありまして、この政権と侵略ベトナム軍が、全人口の半分近く三、四百万人くらいのカンボジア人を殺してしまつたんですね。解放とか革命とかの恐るべき実情をわれわれに十二分に示しています。

かつての大戦で、日本は当時の超大国であった英国とアメリカを相手に、四年近くも広い戦線で戦いました。太平洋戦争の評価についてはいろいろの見解があるでしょうけれど、少なくとも我々が理解していたのは、日本の生存がかつていているということでした。アメリカ、英国の対日強硬政策については日本の外交上の失

敗を指摘する人もいましたが、政府ならびに国民の多くは、米英と戦わずしては、日本国民の前途はない、というふうに考えたわけです。西太平洋の到る所が戦場になり、本土の全主要都市が焼失し、遂に広島と長崎には原爆が投下されて、一度に何十万人も死亡しました。したがって四年近い戦争を通じて多数の日本人が死んだ筈なのですが、実際にはカンボジアで殺された人数と同じ程度ですから、革命や侵略が如何に恐ろしいかということを示しています。すでに中国やソ連などでは、何千万人も殺されたといわれますから、ベトナムやカンボジアが例外ではありません。大略人口の一割くらい殺さない、ああいう独裁政権はうまくいかないようでございます。というのは十人に一人くらいはなかなか言うことをきかないのがあるんですね。兄弟でも十人位いますと、一人や二人はなかなか親の言うことをきかない。いくら親が子供のことを考えてやっても、言うことをきかないのが出てくるのが通例です。大略一割くらい殺せば、恐怖の政治がうまくいくということで、共産政権になれば大体一割くらい殺されるのは覚悟しなければならぬようです。これは事実を話しているものでありまして、沢山の証言もござります。

ソ連なんか革命後六十年以上を超えますが、ノーベル賞作家のソルジェニツインは、政府を

批判したら途端に叩き出されました。サハロフは、ソ連水素爆弾の開発者であります。二十四時間監視下の国内流刑をやられているわけです。裁判も何にもないんですから、気に入らんことを言ったといつては、誰でも処刑されたり、追放されたりするのです。日本では報道されませんけれど、私の手元にはヨーロッパやアメリカの学者から、ソ連における多くの科学者に対する弾圧の情報が相次いできています。君達もなんとかソ連政府へ抗議をやってくれと具体的な名を挙げてきますね。ノーベル賞ももらったソルジェニツインとか、ソ連の水素爆弾を開発したサハロフまであんなに弾圧されるくらいですから、あまり知られていない学者は虫けらの如く扱われているのは間違いないところでありませう。

私はランダウというソ連の理論物理学者を知っています。この人は私と専門が同じであり、二十世紀中葉における世界でトップの理論物理学者だったのです。ノーベル賞は勿論もらいましたが、戦後のソ連理論物理学の中心人物だったんです。ソ連というのはやはり学問を大切にする国だなあ、科学者を大事にする国だなあと思っていましたところ、ソルジェニツインやサハロフが弾圧され、私は大変不思議だったんです。かれらは余程悪いことをしたんだろうな、と思っていたんですが、最近みずす書房か

ら『ソ連における科学と政治』という翻訳が出ておりまして、これを去る一月に贈呈され、一読してびっくりしたわけです。ランダウは残念ながら交通事故で七十年代の初めに亡くなったんですが、一九三八年、ドイツとソ連との間で非常に対立が激しかった頃、ドイツのスパイということで逮捕されて裁判にかけられ、処刑寸前だったんです。ところがカピツァというソ連の戦時研究の指導者であつた優秀な学者が、ランダウの天才ぶりを非常に高く評価しておりまして、彼はランダウを亡くしたのでは、ソ連の科学は育たないと考えたんですね。ランダウはまだ裁判を受けたからよかつたんです。カピツァはスターリンと外相モロトフに私信を送りまして、もしランダウを釈放しないのであれば、自分は戦時研究から一切手を引くと言ったのです。言わばモロトフとスターリンを脅迫したわけです。カピツァにやめられたら、ソ連はドイツと戦争なんかとてもできなかつた。そこでランダウを釈放したんです。またこの本には、革命以後のソ連の科学と科学者に対する弾圧が如何に厳しかったかということ、が具体的に書かれています。この本の著者は交換教授としてロンドンに行っている間に、好ましからざる人物ということでも市民権を剥奪され、帰国できなくなつた人ですが、この本によれば、共産主義に同調しない科学者はもちろん、

理解を示さない学者をほとんど全部投獄してしまつたということです。

それでは、どうしてソ連は戦時中および戦後を通して原爆を開発したり、宇宙科学を開発したかとの疑問に答えられないわけです。私も物理学者としてソ連の科学をよく知っていました。たし、科学者も何人も知っていたんですが、この本によって疑問が初めて解きました。優秀な科学者の多くは収容所にいるわけです。優秀な収容所の中にいろいろの研究所を作つたのです。共産主義者の学者はボンクラが多く、あまり役に立たないが、収容所の中の優秀な科学者は収容所で沢山亡くなつたそうです。前述の市民権を剥奪された著者の父親も、シベリアの流刑先で餓死したんだそうですが、事実上は殺されたわけです。研究所をあつちこつちの収容所内に作り、所謂共産党のボンクラ科学者は自由に家族を連れて行って収容所外に住み、毎日収容所に通うわけです。収容所の中の科学者、つまり共産党でない科学者は「研究に協力したら食糧配給してやるぞ」と言われたり、もしこの研究に成功したら、あるいは娑婆に出られるかも知れない、と考へたことでしょうか。これはパブロフ反射を利用するソ連型の方法といわれている。人間やつぱり食うことができなくなつたら、いくら強い信念でもぐらつくともみえて、飢え死にするぐらいなら、やつぱり協力するということ

となる。刑務所の中の研究所では、秘密がよく保たれ、その実態は前記の本の中に詳しく述べられています。

序ながら、中国の場合はこちらと異なっています。私の親友で、奥さんが日本人の中国人がいます。日本に十二年間いて、旧制第一高等学校から京都大学の建築学科を卒業して中共に帰りました。私とは戦後十年にわたる付き合いですが、一九五五年（昭和三十年）に中共へ帰り、文革でえらい目にあつて、つい二年ばかり前に日本に引き揚げてきました。この人の話では「お前は日本に留学していたんだから、スパイだった」と決めつけられ、なんの証拠もなく、一年半にわたり重労働を強制されたとのことです。私の親友ですから、彼を中国から引き揚げさせるのに私なりに努力をして、日中友好条約が締結された直後に出国できました。恐らく最初のケースではないですかね。現在家族五人幸せに暮らしております。先だつて伊藤律という元共産党幹部が、三十年近くも中国の牢屋に放り込まれたのち、最近帰国したことは、皆さんご存じでしょう。あの人が可哀そうなのは、共産黨員なるが故に日本共産党に虐められて除名され、中共でも虐められて牢屋にぶち込まれ、本当に立つ瀬がないということです。だから帰国後も俺は共産主義者だと言つております。若しも「もう共産党はいやになつた」と言つたの

では、彼の七十年に近い人生は何であつたのか、分らないこととなります。面白いことに、彼の陳述と私の友人が一年半牢屋にいた時の経験が、同じでございます。中共方式という洗脳型です。まず一年くらい独房に入れておくんです。監視人がついて四六時中脅かすわけです。「お前の生命なんて虫けら同然だぞ。誰も知らない」「お前スパイだつたらう」とか、「自己批判書を書け」とか言つて迫るわけです。はじめの数カ月くらいまでは、自殺を考えるんだそうです。私の友人もそうだったし、伊藤律もそうだったようですが、生物的人間の極限を超えるわけですから、だんだん気力もなくなるわけですが、一年くらい経つと、もうどうにでもなれという気になり、全く動物と同じ心理状態、すなわち判断する心は奪われてしまふ。それから今度は毛沢東の教えなどを段々と吹き込んでくるわけ、これを中国では労働改造と呼んでいます。人間改造ですね。相手に対して一切の敵意を喪失させるので、労働改造を受けた人の姿を見たら、直ぐ分るそうです。ですから伊藤律も中国に對する恨みごとはひとつも書いていません。面白いことに、そうなつちやうですね。忠犬ハチ公ではないが、非常に忠実な人間に変えるのが、労働改造という恐るべき非人道的やり方であつて、ソ連とは非常に違います。私はソ連の方がまだ人間的だと思ひます。ソルジェニツ

インは収容所列島の中でも、あの年になるまで反抗したわけです。最後には叩き出されましたけれど、直ぐ長期間独房に入れて人間を変えてしまうやり方とは違います。

私は何故こんなことを申し上げたかと言いますと、次の理由からなんです。先だって五月三日の憲法記念日に、NHKが五党討論会を二時間くらいやったのを、たまたま見ました。あの討論を聴いて残念に思ったのは、各党代表者の話に、的を射てないものが多かったことです。八十年代のヴェイジョンの中の最も大きな問題は、「戦争と平和」の問題です。例えば伊東外相が昨日辞任して、今日の新聞の全てが鈴木内閣の閣内不統一ではないかということで、一斉に書き立っています。兎に角、日米首脳会談を終えて共同声明を出した直後に外相と外務事務次官の辞任が起るといことは、異常な事態であることに間違いありません。これもすべて戦争と平和の問題に絡んでいることも間違いないところでしょう。五月三日の五党討論会のテーマは、日本が戦後三十六年間平和を維持してきたが、その理由は何であったかということでした。たしかに、日本は明治開国以来、そういうことはないですね。絶えず内外の戦争に迫られておまして、言わば十年おきぐらいに戦争をやり、戦争の間は準備を整えていました。しかしこの三十六年間、日本国民は戦争の危機

を感じたことはないし、所謂戦争の脅威に曝されたこともないという事実は、何人も否定できないところですね。尤も間接的には、中近東のイランとイラクが戦争するだけで物価に影響し、我々の台所に響くんですから、戦争に全く無関係ではありませんけど。ある党は、日本には平和憲法があり、国民は戦争に懲りて、もう二度と戦争はしないんだと決意しているために、起らないんだと主張します。また、他の党は、自衛隊があり、安保条約があるので抑止力となつて、そのために起らないと言っているわけです。これらを聴いていると、この人達は戦後の世界情勢の根本的变化を認識しているかどうか、疑問に思います。

皆さんは戦前のことは分らないでしょうが、地図を見れば明らかのように、欧米の先進国はあっちこっちに植民地を作ったり、間髪を入れずに弱い国に攻め込んで、自分の支配下におくことをやっていたわけです。日本も何時植民地になるかも知れないということがあったのです。所謂侵略や他国の合併によつて、これらを自国の権益下に置き、大きな利益を得たんですね。軍事的な支配をしているんですから、石油その他のあらゆる資源が獲得できるし、また自国の製品を高く売りつけることができるわけです。日本も昭和の初期に非常に大きな不況になったんですが、満州を勢力下に置いたことが

この不況を脱却する大きな決め手になったと言われています。実際は、インプットとアウトプットのバランスがどうかというのは、難しい問題であります。例えば、朝鮮半島を明治の終りに合併してずっと終戦まで続けたわけでありますが、これが日本にとつて利益であったかマイナスであったかは別として、少なくとも食糧その他の資源を内地に持ち込んだり、こちらが投資もするが、こちらの品物を独占的に買わせたり、労働力を搾取することはできたはずなんです。このことは多くの国々でもやっていたことで、ぼやぼやしておつたら日本自身がやられていたかも知れないという時代でありました。ロシア革命を指導したレーニンは『帝国主義論』という本の中で分析しています。資本主義諸国はある発展段階になると、市場の争奪戦、資源争奪戦をめぐる戦争したり、他国を侵略する必然性を有するという理論です。一口に言つて、それを帝国主義戦争というんですね。

ところが戦後二つの大きな変化が起つてきました。その一つは、自由世界における自由貿易体制と開放経済体制であります。日本は終戦後東南アジアや満州の権益を失い、朝鮮半島、台湾、南樺太を放棄し、日本よりはるかに広い地域を全て取られてしまったのです。狭い国に資源はなく、食糧も足りないし、油は勿論、エネルギーもほとんどない。こんな国へ、一体、

一億人以上もの人間が集中したら、どんなことになるのだろうか。その日暮しの乞食生活がいいところで、実際、終戦後は食うや食わずで悲鳴をあげていました。ところが、その国が三十五年にして、特にこの七十年代を通じて、経済的に世界で最強、最大の国になったのです。アメリカでさえも、日本にはもうほとんど対抗できません。根幹産業において、全部敗退してしまったんです。今残っているのはIBMを中心にしたコンピュータと通信技術ですが、これだつてすでに日本に追い上げられていまして、八十年代には日本に席を譲るかもれません。アメリカも必死なわけです。昔は日米繊維交渉というのが、七十年代の初めにありましたけれど、そのうち鉄鋼がやられ、鉄鋼というのは現代における国の産業の中心ですのに、日本と競争できなくなりました。ここ五、六年、日本は輸出を自主規制しているのですが、一向によくありません。去年あたりから自動車をなんとかしてくれと泣きつかれて、遂に自主規制に踏み切り、カラーテレビも自粛しました。二百五十万台くらい輸出していたのですが、大分自主規制している状況です。ではアメリカの電機メーカーは生産性がよくなったかと申しますと、少しもよくなっています。こちらがいくら自主規制しても、ちつともよくなるらない。生産性の向上と品質管理がうまくゆかないのです。私は自動車

だつて同じだと思っています。

私、先月ニューヨークへ二日ばかり急用で行つて、アメリカの学者とこの自動車問題を語り合い、それから日本の学者やジェットロ(JET RO)という日本貿易界やニューヨークにいる日本の代表的企業と議論いたしました。その結果を官房長官や党の幹部に報告いたしました。自動車問題の成行きは大体私の予想した格好に落着きました。それほどにしても、アメリカの自動車業界がよくなるとは思われません。八百億ドルもこれから五年間につき込むんだそうですが、日本が自主規制してアメリカの自動車会社が儲けをし、その金を投資に廻すのだそうです。なお、日本には百億か百五十億ドルばかり援助してくれと言つてきています。これは新聞には発表されていません。日本には自動車規制を要請するし、さらに融資援助とは随分虫のいい話ではないかということ、日本もそんなわけにはいかないと断つているとのことでした。日本は自由経済体制によつて世界最大の経済力を維持しているのです。日本は石油も事実上一滴もないですね。九九%輸入し、食糧や各種資源もほとんど輸入です。米が余っていると言ひ、近海で魚が獲れると言ひ、油の輸入が止まったら、日本の農産物も水産物も全部なくなるので、その意味ではこれらはみんな

輸入品なんですね。つまり、米の収穫をあげるためには肥料や農機具も要るし、これらは全部石油に依存しています。天ぷらうどんを例にとつても、油、醤油の原料大豆、小麦粉、えび等々、すべて輸入品でしょう。日本製は水だけというのが実状なんです。それにも拘らず日本の経済力は、軍事産業を除きましたら、世界最大です。一九八〇年代はコンピュータを中心とした通信革命に日米の激しい技術戦争が集中していますが、西欧諸国はすでに脱落してしまいました。一九七〇年代の最初に、日本の自動車はアメリカの自動車業界を脅かすだろうと想像だにした人はいませんでした。それほどアメリカの自動車業界は世界を圧倒していました。当時はフォルクスワーゲンがアメリカへも入り込んでいましたけど、日本のトヨタや日産なんかアメリカのハイウェイを走れるかといつて相手にされなかった。ところが十年を出ずして、こんな状態になったんです。昨年の輸出は百九十万台ぐらいだけ、今年ほつておけば二百五十万台ぐらいまで伸びるでしょう。今日本のシェアは二十%ですけど、ほつといたら五十%に達するぐらいの勢いになっています。アメリカはその根幹産業が潰れたら一大事であるから、何とかしてくれということになるわけです。日本の経済力は全世界の一割を超えており、アメリカはそれでも二割を超えています。日本とア

アメリカで共産圏を含めた世界経済の三分の一を握っているのです。日米主軸と言われているのは、日本にとっては軍事的な意味だけではないで、こういつた経済力がものをいっているのです。その相手国のアメリカが潰れたら、えらいことになります。比較は正しくないかも知れませんが、野球だって一つのチームだけが強くて他は草野球であったり、相撲にしても横綱一人であつてあとは序ノ口程度となれば、観客は集まらないことになります。日本が世界一で、世界がすべて劣等国になつては、日本も立つてはいけない。何故なら、我々は世界中から資源、エネルギー、食糧を輸入し、世界中の国々に対して輸出しているわけです。このように相互依存度が高くなつているので、日本が倒産すると何十カ国かが倒産することになります。今朝も新聞によりますと、イラン、イラクの戦争がちよつとまたおかしいとか、レバノン、シリアとイスラエルとの紛争が危ないとか、いろいろ報道されていますが、中近東でちよつと紛争でも起きると、我々の台所にまで響くのです。今日、世界の平和が保てる最大の理由は、地球次元で、各国間の経済依存性が高まつているからです。今日、正常な日本人の中で、再び軍事大国になつて、満州、朝鮮半島、台湾、樺太をほしいと思つている人は誰もいません。ただ千島だけ、せめて南千島だけは日本固有の領土ですから、

返してくれと要求するのは当然であり、民族的な問題ですね。

戦後世界の開放経済体制がどうしてできたかという点、実は技術革新のたまものなんです。交通、通信が革命的に進歩し、各種の生産物の質と量が大きく改善されたわけですね。技術革新を背景にして世界の秩序が変つちまつたわけです。したがつて、帝国主義戦争を起す必要が消滅したのです。アメリカだつてベトナムに対して何もやらないし、イランみたいな所で自分の国の大使館が占領されても、手出しができません。つまり帝国主義戦争はなくなつたといふことであつて、このことは非常に大事な事実なんです。ですから、レーニンは当時の世界状況を踏まえた上で、帝国主義論を展開したけど、第二次戦争を契機としてレーニンの言う帝国主義戦争の起りうる余地はなくなり、事実一回も起つていません。ところが、いくつかの政党は、レーニンの言つた一九一〇年代の帝国主義論が現代でも適用していると思ひ込んでいます。今日では帝国主義戦争をやる唯物論的基盤がなくなつたのにです。私は唯物論的分析というのは非常に重要だと何時も思つていますが、世の中唯物論ですべて話が済むと思つているところが、社会主義者や共産主義者達のドグマだと思ひます。面白いことに、今日共産主義者達の多くが戦争と平和の問題について

では観念論者になつたことですね。日本人が平和の決意をしているから、戦争はないんだなんて、とんまなことを言つてはいけません。例えば戦前の日本は自国の生存が危ないと信じこんで、当時の超大国アメリカと英国を相手に戦争をしかけて、三年半も戦い続けたんです。若しある国が、自国の生存が日本のために危ないと信ずれば、安保条約があろうと、日本の自衛隊があろうと、日本に戦争をしかけるかもしれない。しかし、現代の国際情勢下では、そういうことによるメリットはどの国にもないんです。何故なら、ソ連が日本を軍事攻撃して占領し、日本を破壊してしまつたら何が残るかといつたら、資源もなく、食糧もない一億一千万人の日本人で、食わすのが大変。二千万人くらい殺してみたって、まだ九千万人以上もいるんですからね。それでは何にも得るものないので、だから、日本に対するソ連の基本戦略は、ソ連の方に向いてくれる社会主義、共産主義政権ができてアメリカを追い出してくれ、自衛隊を解散させ、そしてソ連の台所をまかなつてくれる日本の資本と産業ですよ。

もう一つの大きな変化は、ソ連や中共、あるいはポーランドその他の衛星社会主義国家群と、自由主義国家群との政治的、経済的、文化的交流がものすごく増えたことです。昔はソ連は一国社会主義と称して、どこの国とも相手に

しなかった。貿易もやらない、人間交流もしない、文化交流もなく、孤立していたわけです。今はそんなことはないですよ。東西間の関係が革命的に変ったんです。たとえば、中国は十年前には、当時の内閣総理大臣、佐藤（栄作）さんを軍国主義者佐藤と極めつけ、軍事大国を指す佐藤政権とか言って、日本の左翼も一緒になつて一生懸命に攻撃したものです。佐藤さんは可哀そうに、そんな気なんて何もなかったんですが。当時の日本は経済の面でアメリカに次ぐ大国に近かった時ですから、誰も軍事大国を狙おうなんて思っている人いなかったですよ。その中国より、つい先だつて一兆円ぐらいなるとか援助してくれと申し出があり、日本政府は五千億円ぐらい援助することを約束しています。なんで、そんなに約束するのか、財政再建だといってさわいでいる最中にですよ。中国は日本の援助なしにはもう近代化できないのです。このことは、三十二年に及ぶ共産主義の実験が、台湾の中華民国とは対照的に、失敗であったことを証明しているわけですね。ソ連ではその倍の歴史の実験をやつて失敗だったわけです。未だにソルジェニツインやサハロフなど数限りない人民を追い出したり、投獄したりしなければならぬのだから。行列に明け暮れるモスコウの生活はまだよい方で、地方の生活になつたらひどいそうです。諸君には想像できな

いでしよう。

それでは何故、社会主義が若人を引きつけたかと言うと、社会主義こそ理想的国家、豊かな生活を保証すると信じたからです。しかし、実際に社会主義革命をやった国は、みんな貧困と弾圧と殺戮とを繰り返しているんです。これが果たしてマルクスやレーニンが述べた理想主義国家と言えるか。これらの国々でさえ、今日では自由主義圏との関係なしにはもう生きられないことを証明できるのです。先だつて、ポーランドのワレサ氏が来日し、一生懸命日本に援助してくれと言つてましたが、共産途上国、共産中進国、共産大国を含めて経済的、社会的に混乱しております。私はソ連びいきではありませんが、ついこの間もソ連大使館のパーティに呼ばれました。先日モスクワ大学の総長、この人は科学アカデミーの議長ですが、筑波大学を訪問されたり、その前にはアカデミーの幹部が何人もやつてくるし、ソ連大使館からも参事官がやつてきてました。私に是非、モスクワ大学その他に来てくれと言うんです。文部省といま話し中なんです。国立大学の学長だから勝手な行動はとれません。これは世に言う平和攻勢の一環でしょうか。ソビエトでも、中国でも、表面ではいろんな堅いことを言ってますけど、内心では日本の援助なしには超大国ソ連の経済はもたないんです。十億の国民を擁する大国

中国もありません。こういう実情を知っておくことです。だから、実際には戦争をしかけることは容易ではありません。アフガンみたいな弱い国は可愛想です。十万の軍隊で侵略して、百万人以上殺害したといわれます。日本の存在は大変な事として、日本が倒産すれば、自由主義圏だけではなく共産圏でも、ばたばたと倒産するほど大きな影響力を持っています。例えば、ソ連が日本を攻撃した時に共産中国が黙っているかと言うと、黙っている筈ありません。ソ連はシベリアの戦線が維持できないですよ。世界の情勢は大きく変ったんですよ。日本を占領することが必要になったら、どの国でも攻めて来ますよ。しかし現代は、日本にとつても、世界の国々にとつても、帝国主義戦争はマイナスであつて、やられる方もやる方もマイナスであると悟ったから、帝国主義戦争は起こらないのです。

ただし、七十年代の初めから、一つだけ危険な分子がいるわけです。それがソ連という国です。昼飯をただで食わしてくれるなら、何処の昼飯でも乗り込んで行くというのがソ連なんだけ。しかし、銭をとるのであれば考える、という風です。もつとも、アフガンみたいに、ただ飯だと思つて十万の軍隊を投入したら、抵抗されてえらい目にあつている。極く最近私の大学の参与である牛場さん、元駐米大使で現外務省

顧問の話ですが、外務省がパーティをやったとき、牛場さんとキューバと、新しくソ連圏に入ったエチオピアの大使がお話していたそうです。その時、先輩格のキューバ大使が「エチオピア君、気をつけるよ。ソ連というのは強欲だから。うっかりしておったら、やられるぞ」と牛場さんの前で忠告しておったとのこと。共産圏の衛星国は、どこでも日本に対して非常に好意的ですが、ソ連に対しては閉口しているようです。もし、皆さんチャンスがあったらポーランドであれ、チェコであれ、お前の国はどれくらい反ソか、と尋ねてごらん下さい。九五%は反ソ。五%が共産党員と答えますよ。ポーランドをとってみても、自由主義圏の日本に対しては援助を申し込み、ソ連には「どうぞ侵略しないで下さい」と言っているわけです。

隣の中国は、ソ連のことを赤色帝国主義と名づけていますが、いい表現かも知れません。例えば、東欧圏のチェコは旧工業国で世界の輸出国でしたが、ソ連圏に入れられてから疲弊しちやった訳です。皆さん、チャンスがあったら是非、自由圏と東欧共産圏とを比較してごらん下さい。行ったらすぐわかります。二、三週間もいたら暗い気持ちになって帰って来ますよ。たとえば、ポーランドは経済危機に見舞われ、何時ソ連の侵略を受けるかわからない。ソ連が衛星国から製品を買い上げるときは、所謂ルーブル

という国際価値のない軍票みたいなもので支払います。ルーブルを受け取る自由国家はどこもないんです。ソ連へ行ったら、外国人にはルーブルが高いことを言うんですよ。ルーブルをドルに換えることはできないんです。名目と実質が大体三倍ないし五倍程度は違うんです。つまり、一千万円の製品を三百万円で買い取るわけです。かわいそうに、植民地型なんです。自由国から製品を買い取っても、ルーブルは受け取ってくれないわけです。だから、外貨がもの凄く不足することになるんです。先達てキューバの生活状況を朝日の記者が報道しています。朝日は共産圏に非常に同情的な新聞ですが（笑い）、キューバ人の生活にとつて、三種の神器というのがあるんだそうです。一つはカラーテレビじゃなくて、白黒テレビですけど、国の方針としてソ連の製品を買いなさいやいけ。ソ連製の白黒テレビは二十万円、キューバ人の月給は何万円という程度に安いから、二十万円のテレビを買いのは大変なんです。中国でも、自転車を買うことは彼等の望みなんですけれど、二、三万円するわけです。月給が五千円程度ですからね。我々が自動車を購入するのに匹敵し、何カ年の単位で銭を貯めなければ自転車を買えないのです。ソ連はこのように、衛星国から搾り取って、軍事大国アメリカに対抗する軍事力をつくらなければならない。ソ連の

経済力は日本の経済力より以下なんです。低く見る人で、日本の七割、高く見る人でも八九割です。あれだけの軍事力を開発しなければならぬのですから、国民生活を犠牲にし、衛星国家からありとあらゆる方法で搾取し、軍票ルーブルを使い、古い武器を売りつける。したがって、あんな国を相手にしておったら大変とユーゴや中国が脱落したのはよく分ります。中国が赤色帝国主義と呼ぶのは、そのためです。ソ連にとつては、少くとも他国を軍事的に支配することはプラスになるんです。だから、アフガンへでも行くわけです。ポーランドはどうもソロバンをはじめてみたら、西欧諸国からの制裁が厳しくて、合わないらしいのです。ソ連といえども、日本やアメリカやその他西欧諸国との経済的、学術的、技術的交流は大切なものですから、そこまで止められてしまったらえらいことになり、ソロバン上合わないわけですね。ポーランドでは、去年から五十万の軍隊を周辺において、ソ連は圧力をかけてるけど、言うことを聞きませんね。ポーランドもアフガンのようにはいかないぞということを、読んでますから。ワレサ氏だつてよく知っているわけです。だから、なかなか言うことを聞かない。

一九八〇年代は、共産帝国崩壊の時代ではないかと私も思います。世界の平和確保は、非常に確実になりつつあります。日本の国内のこと

で言う、戦国時代の終焉後は、国内の戦争はほとんどなくなりましたが、世界も帝国主義戦争はなくなりました。ただし、一つだけソ連の扇動する民族解放闘争があります。ソ連の武器をどんどん送り込んで騒動を起こさせながら、彼等は解放闘争と呼んでいます。私に言わせれば奴隸化闘争です。だって、解放されたところは皆ひどい目に会ってます。先般、NHKで放送していましたが、現在エチオピアでは、五百万人が餓死線上にいるわけです。ソ連の経済もぎりぎりまできちゃって、アフガンでは強い抵抗にあつて、手が抜けなくなつた。中ソ国境には百万の軍隊を配置しなけりやならない。東欧圏は何時ポーランドみたいに反逆するかわからない。衛星国でもソ連びいきになっている国はあまりないですね。ある人によると、ブルガリアと東独ぐらいは仕方がないからついているが、あとは西部戦線で何か起つたら、そっぽ向く奴ばかりじゃないかと言われている。これは明かに共産帝国の崩壊です。中ソ一枚岩だと言っていた中ソ同盟は廃棄され、中国にとつてはソ連が最大の敵になつて、日本を最大の味方だと考えるようになったんですから、これは、もう明らかにソ連帝国、世界共産主義体制の崩壊を意味することは間違いありません。

これが八十年代を眺める一つの目であり、だ

からソ連が冒険をやる危険はあるので、これに對して絶えず抑止力を考えておかなければならない。日本は、安保体制とか、自衛力の整備のことは十分考えておかなければならない。日本をただで取れるものなら取つてやろうというのはソ連流です。ソ連が非常に侵略性を持った国家であることは間違いありません。社会党や共産党は、ソ連は平和主義の国家であると、レーニン時代のことを繰り返しているけれど、今日では当てはまらない。ユーロコミュニズムと言つたつて、ソ連に對しては皆批判的なんですよ。日本の共産党もかなり批判的な意見をもっているようですから、兎に角レーニンの時代は終つたんです。マルクスの時代も終つたんです。それは、科学技術を背景にした巨大な物質文明が誕生したからです。この点は我々が八十年代のヴィジョンを考える場合の出発点です。民族的な対立や宗教上の戦争は別として、帝国主義戦争はもう起り得なくなつたことと、ソ連のただ飯食いの性癖に對しては、我々は絶えず警戒してはならないが、相互依存度が東西、南北間の戦争を困難にしている点も重要な側面です。

八十年代を通じて日本の国際競争力がどうなるのかということについては、強まることはあつても弱まることはまずないでしょう。ただし、幾つかの前提条件がありますよ。先ほど自

動車産業が十年にして想像もしなかつたほどに日米逆転したけれど、コンピュータの場合には既にIBMは日本を敵にして、敵という言葉が適当かどうか戦争の意味はございませんけれど、日本をターゲットにして全力を挙げてその牙城を守ろうとしているんだけれど、アメリカにおける生産性の低下は覆うべくもない事実です。これには、いろいろ理由があるんですが、アメリカがバイタライズ(vitalize)してくれなければ、つまり活力を持ってもらわないことには、日本の将来にとつてもいろいろ都合が悪いわけです。相互依存度が強い時代ですから、アメリカの経済もうまくやつてくれなければいけません。物事の見方が右から見るか、左から見るかで対立が起こるんです。ソ連を見る場合も、軍事的側面からか、経済的側面からかで、対立が起こります。このような対立は日米間にも、日本政府内部にも存在するでしょう。しかし、私は日本政府の中に基本的な対立があるとは全く思つていません。

さて、いろんな問題が出ておりますが、私は二つの問題について諸君に注目してもらいたいです。一つは、科学技術文明というものが産み出しているプラスの面であつて、これはもう言うまでもなく、諸君が毎日の生活をエンジョイしているのは科学技術文明のお陰なんです。それから、それが産み出しているマイナス

の面ですが、これはやはり人間の問題にからむ問題です。価値観が動揺するとか、あるいは未来に対する不安感が出てくるとか、いろんな問題があるわけで、或る人はこれを人間の墮落だと呼んでいます。単刀直入に言えば、諸君が知つてのとおり、人間である以上は知的側面と、道徳的側面と、身体的側面がきちんとバランスを保つてなくてはいけない訳です。身体が悪くなつたら、どうにもならなくなるし、いくら身体が丈夫でも、人間的に劣等生では具合悪いし、それから知的な判断力を失つても困ります。知徳、体の一体化とよく言われているものですね。このバランスが崩れたら、人間としての資格がなくなるわけです。ところが、科学技術文明は、ややもするとこのバランスを破壊するんです。たとえば、年がら年中テレビばかり観ていると、判断力が低下しますね。情報がテレビに支配されて、自分の判断が分らなくなり、知的に非常に墮落する訳です。これはおわかりですね。自分で物事を考え、自分で本を読んで思索することに向かなくなるのです。それから、便利がよいかからすぐ車に乗るし、二階に上るにもエスカレーターに乗る。昔は二軒(キロ)、三軒の道のりを歩いていました。私なんかは、中学のとき三軒半の道を毎日歩いて往復ですよ。こんなことはこの頃ありやしないですよ。今日の若者はうまい物を食っているから図体はでっかいけ

れども、頑張りがなくなっています。体力の低下は覆うべくもないですね。

一昨日、私は中部生産性本部の二十五周年記念講演に行ってきました、その昼食の席に通産の事務次官がみえていました。中部オリンピックをやつて、少しは金メダル取れるのときいたら、誰かがちやちやを入れて、日本は豊かになり過ぎて根性がないから金メダルは危ないということになりました。戦争前の貧乏な時には、水泳では金メダルを沢山取りましたからね。ロサンゼルスでは、半分以上金メダル取っちゃいました。こんなに豊かになったら、兎に角、体力的に頑張りがなくなってきました。昔ですと、例えば、私のうちに田舎から小豆でも送つてきたら、赤飯をたいて、隣のうちに赤飯いかがですか、と持つて行つたり、お芋いただきましたが、と近所づき合いが大変豊かでした。ところが、この頃みたいに科学技術文明が発達し、ボタンを押しただらどんなうまいものでも出てくるようになると、味噌汁だつて、女房が作るよりよっぽどうまいですよ。私は筑波で今自炊していますが、電子レンジに入れりや何でも食べられます。他人は言うに及ばず、女房にだつて頼らなくてよい時代なんです。だけど、我々の場合には、まだ貧乏時代から一緒に味わつてきたが、これからの若い人達は可哀相だと思えますよ。このように、人間的な暖かさや感謝の気持

が科学技術文明によって破壊されていることは、間違いないんです。何故にそういう技術文明ができたかは別として、だんだん他人の有難味がなくなつてくるので、知、徳、体のバランスが破壊されるんです。私はこのことを科学文明の麻薬的作用と呼んでいます。麻薬がなんでもいいのかと言つたら、麻薬を常用していると、今のような事態が起つてくるからです。科学技術文明によつて人間的な退廃が進み、このことが社会の存立さえ危うくするかもしれません。これは先進国における共通の問題なんです。それでは、科学文明をやめたとすれば、例えばわが国では一億一千万人も食うことさえできません。少なくとも半数くらい死んでもらわなければならぬでしょう。特に日本は、居住面積でいえば、工業先進国中世界で一番狭いんです。それで世界一繁栄しているんですから、とても科学技術文明にバイバイできない訳です。

ところで、科学技術文明による人間性の破壊との矛盾が、どうして起つてくるのでしょうか。第一に、科学技術文明の進歩は十年位の単位で起つていうことです。皆さんもよく使用する各種のエレクトロニクス製品は、十年もすると、がらつと変つちやうんです。買つてから四、五年したらもう古くて駄目だなんて調子でね。自動車だつてそうです。部品がなくなつちやうん

です。性能の良さを一般の人達は歓迎していません。昔のように故障ばかりしていた車では、とてもハイウェイは走れません。今日ではそんなものは見られないでしょう。カラーテレビだって、そうでしょう。最近のは故障も起らないし、消費者もこれを歓迎しているんですよ。しかも、そればかりか、科学技術文明の発達によって、諸君の生活様式も変ってきている。生活様式が変ってくるから、考え方も変ってくる。人間関係にも変化が現われてくるわけですよ。

ところが社会の体制というものは、百年経ってもそんなに簡単には変ってこない。たとえば、刑法は、百年経っても昔のままです。昔は考えられなかったいろんな犯罪が起ってきているんですよ。今、刑法改正が叫ばれているけれど、これは戦前に考えられたことなんだそうですよ。今の科学技術文明に応ずるような刑法なんか、作れそうにないとのことです。日本の最近の第二臨調のような行政改革は、絶対にうまくゆかない。百年間の日本の政治、行政、司法のあり方なんか、私に言わせればナンセンスですね。例えば皆さん、裁判官がですよ、原子力の安全性や難しい病気の原因なんかを裁判所に持ち込まれて、イタイイタイ病の原因がカドミウムであるとか、スモン病の原因がキノホルムであるとか言ってるんですよ。そんなことを聞いたら、世界中の者みんな笑いますよ。まあ、

日本の場合には仕方ないでしょうね。原子力の安全性という問題は、質の高い専門的なことなんです。科学技術、経済なんかいろんなことを知ってなきや判断できない。六法全書しか読んでいない裁判官にこんなこと判るわけがないでしょう。こんな馬鹿げた裁判制度がどこにありますか。皆さんも知っている徳川時代の大岡裁き（奉行）なんか、あれは明治まで三百年間やっていたんですよ。これはあまりにもひどいというので、明治になって今日のような裁判制度になったんですよ。それ以来百年間、裁判は全然変っていないんですよ。

今日の占領憲法は、終戦直後マッカーサーの命令で発議され、当時東京などは焼野原で、日本人にとつては食えるかどうかの問題な時だったんです。そんな時に、いちいち憲法の内容なんか考えていられない時代でしょう。さらに、制定後三十五年の間に日本は世界一の貧乏国から経済大国に成長しました。憲法改正を検討するのは遅すぎるといつてもよいでしょう。丁度、皆さんが五歳のときの服を、今着ると言われるようなもので、それは無理でしょう。やっぱり考え直さなければならぬ問題がいっぱいあるんですよ。終戦後の翌年、今から三十五年前には、アメリカは日本を保護国にするつもりだったんですね。だから日本の軍隊は全部解体したんです。保護国にして、俺がお前のところ

の国土を守ってやるから心配するな、といって作ったのが憲法なんです。しかし、世の中が変っちゃったんです。アメリカが「お前、何とかしてくれ。自由世界の防衛はアメリカだけではどうにもならないんだ」と日本に言ってきたときに、押しつけられた現憲法があるものだから、いろいろ解釈を変えたりするんだけれど、なかなかうまくいかない。特に革新陣営やマスコミに望みたいことは、こういう世の中の変化に対してどうするかという柔軟な頭をもってもらいたいものです。さきほど言ったように、世界的な次元で戦争状態は起りにくくなっているんですよ。左翼の人がいつも言うけれど「昔来た道だ」とか「戦前と同じだ」とか、いまだに馬鹿げた観念論ばかり言っていることが問題です。あの人達は、レーニンやマルクスが生きていたら破門される連中ですよ。お前、唯物論をもう一回勉強してこいってね。今は世界中が変っちゃったんですよ。

さらに人間の問題となると、千年や二千年は変らない。例えば、キリスト教の聖書は未だに一生懸命に読まれています。また、コーランの教えがイスラム教国を支配したり、あるいはアジアには儒教や仏教が今だに我々を支配しています。ギリシャの彫刻が今日でも我々現代人の心をとらえるじゃありませんか。カント、ヘーゲル、ゲーテ、シェークスピアなどの哲学者

や文学者の本が現在の我々の心に生きています。つまり、五百年、千年、一千年という時間を超越する人間の問題があります。

技術文明は我々の生活を十年単位で変えています。社会体制は百年ぐらいで変っている。こういうインバランス (imbalance) が戦後の非常に大きな特色なんです。これを克服する力をまだ人間は持っていないんです。例えば、最近のスペースシャトル等は軍事兵器と同じなんです。軍事兵器と言ったんでは世界に評判も悪くなるし、アメリカ国民も誤魔化せないから「宇宙への夢」なんて言っているんですよ。本当は米ソの宇宙戦争の抑止力の大小を競っているんですよ。宇宙へ行って人類が住むなんて馬鹿げたことを、真面目な顔をして言う学者がいるようですが、日本だけでも山を開発すれば、何十億人も住めますよ。無理してあんな淋しい宇宙に住むことなんかありませんよ (笑い)。

地球の方がよっぽど緑が多くて、山の中でも宇宙よりましですよ。軍事費だと言うと国民は反発するから、夢だ夢だと言って誤魔化しているんです。千年先のことは分かりませんが、ここ五十年や百年ならこんなことを考えなくてもいいんですよ。ですが、先ほどのような人間の問題と社会の問題と、制度の問題と科学技術の問題はいろいろな歪みを残しています。この問題をどう解決するかが八十年代のヴェイジョンな

んです。

それから、先ほど申し上げたように、国際相互依存度が強くなりました。昔は、日本の利益はアメリカや中国の利益に反する。つまり向うの利益は日本の不利益になるということで、国家間で大きな競争があつたんですよ。個人の間でも同じです。個人と国家の問題がこんなうまく一致したことはかつてなかった。国が潰れると個人生活もなくなる。一国の運命は他国の運命と深くかわり合っている。中近東での混乱がこちらの生活に影響する。ですから、ある意味で君達は幸せなんです。つまり、お国のことを考えることが自分のことを考えることになります。お国のことを考えることは、同時に世界のことを考えるということになります。世界の問題、あるいはアジアという地域の問題、日本の問題、諸君の問題と、みんなつながっているんです。こういう時代に諸君は生きているわけですから、絶えず、広く物を見る目を養成しておかなければなりません。

特にわれわれの日本が最も国際依存度が強い。資源も、食糧も油もないのに、世界で一番経済的競争力をもっている国ですから、世界中から期待されます。工業先進国、発展途上国、共産大国、共産途上国全部から期待されます。鈴木総理もアセアン (ASEAN) で二、三千億円ばらまいてきましたが、総理になつてみた

いですね。世界中からお札を言われていい気分でしょう (笑い)。アメリカに行つては、自動車の自主規制してやつて感謝されていい気分でしょう。アメリカの大統領に頭を下げられた総理は初めてのことで (笑い)。

諸君は二十歳前後であり、二十一世紀まであと二十年しかありません。四十歳前後の君達があらゆる層で指導的、中堅的立場にある時代です。ただし、この八十年代を切り抜けないと、二十一世紀は来ません。八十年代をきちんとしなければならぬ。平和の基盤はでき上つてい

るのだから、日本と世界の関係をきちんとし、世界のことを本當に知り、日本のことを世界に知らせ、そして、日本が世界の中で大きな役割をする必要があるのです。自分のことだけ考えていると、世界から袋叩きにあいます。ある人が、進歩的文化人ではないが、言いました。「世界への脅威は日本とソ連の二国だけだ。侵略的なソ連と経済的脅威を与える日本」と。この言いは正しいとは思われないけれども、一般的にはこう受け止められている。そう受けとられないためには、日本の重要性を世界の人々に解ってもらふようにしなければならぬ。これは不可能なことではなく、実は可能です。しかし、日本人は何千年間世界から孤立して生きてきました。今日いらつしやる方でも、外国を見た人はほんの僅かでしょう。ところが、日本のこ

とになると、社会科学や人文科学の論文は日本語で書き、英語で書きません。自然科学は国際性が強いが、社会学や人文科学は民族性が多く現れるからです。何とか日本のことを勉強しようと思つてアメリカでもいろんな本が出ていますが、日本のことを外人が理解するのは至難の業です。これらの本に書かれていることは表面的なことが多く、肝心な日本人の考え方などの内面的なことは解りません。私達日本人がアメリカに行くと、まず自らを洗脳しなければ話を通じません。我々と彼等とは根本的に発想法が違うので、発想法を変えた上で彼等と接するときにはじめて彼等に我々の真価がわかるのです。その時はじめて、日本は世界を救う叡智をもつているということが彼等に解ります。アメリカの評論家が日本のことをいろいろ書いていますが、本当のいいところを書いている人は誰もいません。

つまり、日本には何と云うのか「縁」という考え方があるのです。例えば皆さん、和敬塾で同僚になると、一つの縁ができます。単に外国人が言う友達以上の一生を通じた一つの関係が生れます。縦、横、兄弟の縁、家族の縁、地域社会の縁など、いろんなところで縁ができます。その縁が私達の人生においてどれだけの重みをもっているか、すべての日本人が知っています。私もそうです。それが大きな力なので

す。技術文明を克服すると同時に、豊かな社会を築いているのは日本だけです。大都市を安全に歩けるのは日本だけです。縁は大事にしなければならぬ。腐れ縁は不要だが、いい縁は育てなければならぬ。そして、育てた縁の力によつて、自分は〇・五の力しか持つていなくても、いつも一や一・五の仕事ができる。日本の社会は、そういう縁で人間関係が形成されています。縁で結ばれた人は、利害を越えて応援してくれるのです。一方、欧米ではギブ・アンド・テイクの人間社会であつて、こちらが相手に一くれと言つたら、必ず一やらなければならぬ。これを私は線型社会(リニア・ソサエティ)と呼んでおり、論理的にできています。これに対して日本の場合のように、縁があれば利害関係を越えて相手に尽す人間社会を、私は非線型社会と呼びます。外人に我々の社会が理解されないのは、我々の道徳が縁を基礎にしてでき上つていないからなんです。西洋の社会では、道徳は神様と自分の良心の関係である。神様の權威が崩れたら道徳の基本も崩れます。我々の社会ではこういうことにはならない。というのは、我々の社会は縁というものが絡まり合つていて、この絡まり合つた縁が日本の倫理を支えているからです。「縁」を大事にする人は人生で成功し、粗末にする人は没落します。日本が世界一の技術開発に成功すると同時に、世界で

一番安定した社会を持つている所以なんです。だから、皆さんも日本をよく見直して下さい。そして、世界にこの素晴らしい日本の力を知らせて、世界のために尽すことを八十年代にやらなければなりません。この国際化時代に日本の果たすべき役割を本当に考えて、それを着実に実施に移さなければならぬのです。そうすれば、二十一世紀は、悪い意味ではなくて、日本の世紀でしょう。その時こそ、世界中から尊敬され、世界中から信頼されるのです。現在は期待されてはいるが、尊敬まではいっていません。八十年代の日本には、世界の苦悩を自分の苦悩とし、我々のもつている叡智を世界に開放しなければならぬ時代です。私は、それによつて、我々の将来は安泰だということを確信しています。もし、軍事的脅威国ソ連と並んで、日本が世界の経済的脅威国になったら、日本の将来はだめですよ。日本は世界にとつて必要ないと、世界中から思われたら、資源も、エネルギーも、食糧も入ってきません。日本の製品なんか買うなどということになったら、我が国は没落するだけですよ。その時こそ、もうどうにもならないし、最も惨めな姿になります。ですから、我々は、どんな犠牲を払つても、我々の叡智を世界に開放すべきです。例えば、GNPの1%しか防衛費に使わないのなら、なんで2%くらいは国際協力に使わないのかと言いたい。今年度の防衛

費二兆四千萬円、厚生省予算八兆八千億円も使っています。

私は、年間一十億円か二十億円を使って、発展途上国から若い優秀な学生を五、六千人呼んで教育し、そして帰って来たらそれぞれの国家の開発に役に立てようではないか、と主張しているのです。先生達は世界中から専門家を呼んでくる。年間一十億円使えばいいですよ。そして、その人達は四、五年後には千人、二千人と自分の国へ帰ってゆくわけですよ。多くの日本人と知合いになり、日本の製品は素晴らしいから使わなければいかん、日本人は本当に親切なんだ、そして我々のことを考えてくれてるんだってことを肌で感じさせて、若きリーダーを養成しよう、政治家にも言うんですけど。それじゃやろうと思う政治家はまだほとんどないですよ。本当はそれを一刻も早くやらなければならぬのです。大平さんの時にも、教育者を再教育しなければいかんということで、筑波大学へ十人、全部で五、六十人の発展途上国の人が来ていましたが、これくらいじゃもう桁が違うと言うんですよ。五、六百人か五、六千人なら分りますけれど。インドネシアだって一億人以上いるんですよ。

最後に一つだけ申し上げておきます。日本人は戦後大きな選択を二つやっているんです。一つは独立なんです。昭和二十六年にアメリカの

占領から独立をやったんです。その時は吉田内閣がやりました。日本が独立して初めて一人前になるかと決意した年です。それから昭和三十五年です。この時に現在の日米安保条約ができました。それまではアメリカの保護国としての安保でしたが、独立国としての日米安保条約ができたんです。去年は二十周年記念でした。安保条約こそ日本の今日の経済成長をもたらした、日本は世界最大の競争力を誇る国になったんです。しかし日本には必ず強い反対勢力があります。社会党左派と共産党、それから左翼労働組合と日教組、進歩的文化人、それから朝日を中心としたマスコミ界主力、これらを「四人組」と私は呼んでいるわけです。この四人組がいつも一致して反対するんですよ。安保条約は戦争への道だと主張しました。講和条約の時、ソ連は北方領土をとってるし、中国は革命政府になったばかりで混乱してるし、中国とソ連のような国と戦争状態のまま講和条約を結ぶのは戦争への道だと言って反対し続けたわけです。四人組が一緒になって反対し、革命騒ぎまでやっている。その時の状況は諸君は知らないが、今日おられる先生方は皆さんご存じのことです。これはみんな嘘だったわけですね。

今、日本は第三の選択を迫られています。第三の選択に対してもこの四人組が一緒にな

って反対しています。それは自由世界の安全保障に關してです。日本が潰れたら、自由圏がばたばたと倒産します。自由圏が倒産すれば日本だけ生き残るわけにはいきません。日本の安全は、日米を主軸とした自由主義世界の安全保障体制を基礎にして成り立っているからであって、これをちゃんとしなければいけません。それは何かと言ったら、国連が認めている集団自衛権の問題です。日本が国連憲章を認めるなら当然、日本は集団自衛権をもつていい筈なんです。これが何故憲法によって制約されるのか私にはわかりません。普通の自衛権と全く同じ種類の問題であることは、国連憲章に認められています。八十年代初期の日本の選択は安保の問題であって、経済大国日本が世界平和のために貢献することです。何故なら、戦争になれば日本は完全に崩壊するんですよ。我々、戦争になったらもう生きて行けないんですから、平和は至上命令なんです。この点では社会党も、共産党も、私も同じ意見でありまして、方法論が違っただけですね。私は、途上国からも、共産圏からも、どこからでも学生を大量に迎えなさいというんです。そういう国際交流を通じて平和の指導権をとろうとっているのです。しかし赤色帝国主義的勢力はあるわけですから、かれらの侵略への誘惑を起ささせてはいけません。アフガンと同じようにやられたんじゃ、た

まったもんじゃないですから。これこそ自由圏の集団保障問題です。八十年代の第三の選択をめぐって、これから国論が沸騰するでしょう。

ただ、私は、はっきり申しておきますけれど、日本の運命は世界の運命であって、共産圏と戦争しなきゃいけないなんてちつとも思いません。何も戦争して得ることがないんですから。ただ、侵略されることだけはまっぴらです。アフガンやポーランドにはなりたくないです。かつてのチェコのようにはなりたくない。それだけのことです。我々は、共産圏を含めた世界の平和、世界の発展に寄与できるんだということを彼等に示しながら、彼等に侵略への誘惑だけは止めてもらわなければ、いや止めさせなければならぬのです。この点を強調しまして、私の講演を終わりたいと思います。どうも、長い間ご静聴ありがとうございました。(拍手)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。